

氏 名	尾 高 田 鶴 子 お だか た づ こ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 443 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 43 年 5 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	接 解 型 過 敏 性 の 特 異 的 減 感 作 の 實 験 的 研 究

論文調査委員 (主 査) 教 授 太 藤 重 夫 教 授 田 部 井 和 教 授 加 藤 篤 二

論 文 内 容 の 要 旨

日常、私達が遭遇するアレルギー性接触皮膚炎の患者においては、皮膚炎は治癒してもその接触アレルギーは通常数年あるいはそれ以上にわたって持続する。再発を防止する手段としては抗原との再接触を避けるにとどまり、減感作の治療はほとんど行なわれていない。実験的にも接触アレルギーの減感作あるいは脱感作を試みた報告は二、三見るのみでこの面の知識は乏しい。

著者は海猿の dinitrochlorbenzene (DNCB) あるいは chlorprothixene (CPT) に対する接触アレルギーを対象とし、抗原を皮膚塗布、静脈内注射、腹腔内注射により投与し、その減感作的效果を観察した。

実験成績

- 1) 約0.2cc の0.03% DNCB アセトン溶液を1日1回連日皮膚に塗布した。30日間塗布群においても、100日間塗布群においても貼付試験に対する反応度に低下は認められなかった。
- 2) 0.5% DNCB Tween 加水溶液 Pro. Kilo 2cc 静脈内注射6時間後に行った貼付試験に対する反応度は、静注前日のそれに比し明らかに低下した。この低下はさらに7日後行なった貼付試験においては以前の程度に回復しており、一過性のものではあった。次に、DNCB と CPT で二重に感作した海猿に0.5% DNCB Tween 加水溶液あるいは1% CPT 水溶液 Pro Kilo 2 cc を8~10日の間隔をおいて別々に静脈内に注射し、注射6時間後再抗原の貼付試験を行なった。その結果、抗原静注による反応度の低下は各々の抗原に特異的であることを確認した。この実験において感作海猿の末梢白血球数は正常海猿に比べ有意の差をもって増加していることが認められ、また抗原静注6時間後においては白血球数は36%に至る減少を示し、この減少はリンパ球の減少によるものであることが認められた。
- 3) 0.5% DNCB Tween 加水溶液 Pro Kilo 2~4 cc の腹腔内注射によっても感作海猿における貼付試験に対する反応は低下することが認められた。次いで、この腹腔内注射を1週に1回くり返すことにより3週間後なお反応度の低下を観察することが可能であった。

以上の実験成績から、海狸における接触アレルギーにおいては抗原の静脈内あるいは腹腔内注射により過敏性を一過性に低下せしめ得ること、ことに後者の場合、注射をくり返すことにより3週間後なお低下を観察し得ることが認められた。このことは人の接触アレルギーの減感作の可能性を示唆するものである。

論文審査の結果の要旨

接触型過敏性の特異的減感作については未だ実験的根拠に乏しく臨床的にもその面からの処置はほとんど行なわれていない。著者は海狸を用い減感作の可能性を実験的に検討した。まず dinitrochlorbenzene (DNCB) 感作海狸に少量の DNCB 溶液を1日1回連日塗布を試みたが、30日間塗布によっても、100日間塗布によっても過敏性の低下は認められなかった。次に0.5% DNCB水溶液 2 cc/Kilo の静脈内注射により一時的過敏性低下が生ずることを観察したので、DNCB と chlorprothixene に二重感作した海狸において各抗原を別々に注射し、その際生ずる過敏性の低下が特異的であることを確認した。

抗原注射後、海狸の末梢白血球においてリンパ球の減少と多核球の増加が見られ、白血球総数は多くの場合減少する。次に0.5% DNCB 溶液 2～4 cc/Kilo の腹腔内注射によっても静脈内注射におけると同様に一時的過敏性低下、末梢白血球変動を示した。この腹腔内注射は1週1回繰返すことにより3週間後なお過敏性の低下を認めることができた。以上の成績は海狸の接触過敏性が抗原の少量投与により一時的ではあるが低下することを証明したものであり、人の接触型過敏性の減感作の可能性を示唆したものである。

本論文は学問的に有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。